
埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第119集

台耕地遺跡（第5次）

2010.8

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 第119集

だい こう ち い せき
台耕地遺跡 (第5次)

2010.8

深谷市教育委員会

序

このたび、深谷市教育委員会では、「台耕地遺跡（第5次）」の発掘調査報告書を刊行するはこびとなりました。

台耕地遺跡は、花園インターチェンジ建設工事に伴うものを始めとする発掘調査により、縄文時代から平安時代にかけての大きな集落跡であったことが分かってきました。現在、深谷市の玄関口の一つであるこの地が、昔から、荒川北岸の拠点となる生活の場であったことを窺わせます。

現在、深谷市には旧石器・縄文時代から近現代までの様々な遺跡が残されています。こうした遺跡は、一度消滅すると二度と見ることのできないものであり、これを保護し、後世に伝えていくことは私たちの大きな課題です。今回の発掘調査成果を報告書というかたちにとまとめ、広く市民の皆様にご紹介することで、郷土の歴史の古さやその優れた文化について、ご理解を深めていただきたいと思います。また、この報告書が学術研究はもとより、学校、社会教育などの生涯学習活動を通じて、皆様が歴史を考えるための資料として役立てば、望外の喜びです。

今回の発掘調査および報告書作成にあたり、深いご理解とご協力をいただきました関係者の皆様に、心から感謝を申し上げます。序にかえます。

平成22年8月

深谷市教育委員会

教育長 小 柳 光 春

例 言

1. 本書は、埼玉県深谷市黒田字上南原764番1他における倉庫建設工事に伴う台耕地遺跡第5次発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、深谷市教育委員会が主体となり、調査費用については永田不動産株式会社が負担した。
3. 発掘調査期間は、平成21年9月3日～平成21年9月29日である。
4. 発掘調査は知久裕昭の管理のもと、土生朗治（有限会社毛野考古学研究所）が担当した。出土遺物の整理、報告書の執筆は知久が担当した。
5. 基準点測量及び遺構測量は、有限会社毛野考古学研究所に委託した。
6. 石器の実測及びトレースは、株式会社シン技術コンサルに委託した。
7. 出土遺物は、深谷市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査から報告書作成に至るまで、次の諸氏のご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表したい。

埼玉県生涯学習文化財課

青木克尚 古池晋禄 竹野谷俊夫 富田和夫 鳥羽政之 松田 哲（敬称略）

凡 例

1. 遺跡原点は、世界測地系による国土標準平面直角方眼座標 $X = 13560.000$ 、 $Y = -525000.000$ である。また、各遺構図における方位指示は、全て座標北を示している。
2. 遺構の略号は、次の通りである。
 竪穴建物跡…S J
3. 遺構・遺物実測図の縮尺は、適宜スケールで示した。
4. 石器の観察表において、「未成品」は、剥離による成形のため、製品か否か（製作途中）かの判断が不明瞭な器種に使用した。また「未製品」は、研磨による最終調整痕から、確実に製品と判断できる器種に使用した。

発掘調査の組織

発掘調査（平成21年度）

調査主体者	深谷市教育委員会	教育長	猪野 幸男
		教育次長	石田 文雄
		次長	島崎 保
事務局	深谷市教育委員会生涯学習課	課長	澤出 晃越
		課長補佐	吉場 厚仁
			須藤 忠昭
	文化財保護係長	村松 篤	
	主査	宮本 直樹	
	主任	荻野 直美	
		知久 裕昭	
	主事	幾島 審	
	主事補	飯島 峻輔	

報告書刊行（平成22年度）

調査主体者	深谷市教育委員会	教育長	小柳 光春
		教育次長	塚原 寛治
		次長	澤出 晃越
事務局	深谷市教育委員会生涯学習課	課長	小林 毅
		課長補佐	吉場 厚仁
	文化財保護係長	村松 篤	
	主査	宮本 直樹	
		知久 裕昭	
	主任	荻野 直美	
	主事	幾島 審	
		飯島 峻輔	

調査参加者

阿部ルリ子	伊藤 昌	上野 享子	梅沢 敏男	梅沢 政子	江原佳与子
大澤 大美	小野寺和子	齋藤 舞	島崎 祐子	関口由美子	滝田 悦子
田代さち子	富田もえみ	浜野 光子	菱田 晃彦	松下知恵子	丸山 和枝
山野 政子	横山 明美	吉野九の枝	吉野真由美		

目 次

序	
例言	
凡例	
発掘調査の組織	
I 発掘調査の経過	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 発掘調査の経過	1
II 深谷市の地理的環境と周辺遺跡の様相	2
III 遺構と遺物	7
1 竪穴建物跡	7
2 調査区出土遺物	14
3 地形と倒木痕	21
IV 調査のまとめ	23
報告書抄録	

挿図目次

第1図 台耕地遺跡及び周辺の遺跡分布図	3	第13図 第1号竪穴建物跡出土石器(3)	13
第2図 台耕地遺跡の位置と発掘調査区	4	第14図 第2号竪穴建物跡	15
第3図 台耕地遺跡第5次調査区全体測量図(1)	5	第15図 第2号竪穴建物跡遺物出土状況	16
第4図 台耕地遺跡第5次調査区全体測量図(2)	6	第16図 第2号竪穴建物跡出土土器(1)	17
第5図 第1号竪穴建物跡	7	第17図 第2号竪穴建物跡出土土器(2)	18
第6図 第1号竪穴建物跡遺物出土状況	8	第18図 第2号竪穴建物跡出土石器(1)	19
第7図 第1号竪穴建物跡埋甕炉	8	第19図 第2号竪穴建物跡出土石器(2)	20
第8図 第1号竪穴建物跡出土土器(1)	9	第20図 調査区出土土器	20
第9図 第1号竪穴建物跡出土土器(2)	10	第21図 調査区出土石器	21
第10図 第1号竪穴建物跡出土土器(3)	11	第22図 倒木痕分布図	22
第11図 第1号竪穴建物跡出土石器(1)	11	第23図 台耕地遺跡全体測量図	24
第12図 第1号竪穴建物跡出土石器(2)	12		

表目次

第1表	台耕地遺跡及び周辺の遺跡一覧表……………3	第4表	第2号竪穴建物跡出土石器観察表(2) ……19
第2表	第1号竪穴建物跡出土石器観察表……………13	第5表	調査区出土石器観察表……………20
第3表	第2号竪穴建物跡出土石器観察表(1) ……18		

図版目次

図版1	調査区遠景(北西から) 調査区全景 A区全景
図版2	A区遠景(北東から) B区全景 C区全景
図版3	第1号竪穴建物跡(1) 第1号竪穴建物跡(2) 第1号竪穴建物跡遺物出土状況
図版4	第1号竪穴建物跡埋甕炉(1) 第1号竪穴建物跡埋甕炉(2) 第1号竪穴建物跡埋甕炉(3)
図版5	第1号竪穴建物跡埋甕炉掘方 第2号竪穴建物跡(1) 第2号竪穴建物跡(2)
図版6	第2号竪穴建物跡土層断面 第2号竪穴建物跡遺物出土状況 調査風景
図版7	第1号竪穴建物跡出土土器(1~12) 第1号竪穴建物跡出土土器(13~26) 第1号竪穴建物跡出土土器(27~35・37・38・40~43)
図版8	第1号竪穴建物跡出土土器(36) 第1号竪穴建物跡出土土器(39) 第1号竪穴建物跡出土石器(1~9) 第1号竪穴建物跡出土石器(10~17)
図版9	第2号竪穴建物跡出土土器(2~13・15~18) 第2号竪穴建物跡出土土器(19~31) 第2号竪穴建物跡出土土器(33~36) 第2号竪穴建物跡出土土器(1)
図版10	第2号竪穴建物跡出土土器(16) 第2号竪穴建物跡出土土器(32) 第2号竪穴建物跡出土石器(1) 第2号竪穴建物跡出土石器(2~13) 調査区出土土器・石器

I 発掘調査の経過

1 発掘調査に至る経過

深谷市は、埼玉県北部に位置し、北を群馬県との境に接する。平成18年1月1日に旧岡部町、旧川本町、旧花園町と合併し、総面積137.58km²、人口約146,500人となった。当地は農業、工業ともに盛んで、古くから深谷ネギの産地としても有名である。歴史的に見ても、後期旧石器、縄文、弥生時代、古墳時代を始め、幡羅郡家や榛沢郡家が造られそれぞれ郡の中心として機能していた奈良～平安時代、また百済木遺跡で郡領クラスの豪族が居宅を営んだ奈良時代、深谷上杉氏の拠点であった室町・戦国時代、宿場町として栄えた江戸時代、そして近・現代まで多くの遺跡、文化財が残され、非常に重要な土地であったことが窺える。鎌倉時代の有力御家人であった畠山重忠の本拠地として、或いは近代日本経済界を築いた渋沢栄一の生地としても良く知られる。

台耕地遺跡は、秩父鉄道永田駅の南西約1.5kmにあり、関越自動車道花園インターチェンジ周辺に広がる。標高は約75mで、面積は約132,000m²である。これまで埼玉県や花園町により調査が行なわれており、縄文時代前期、古墳時代前期、平安時代を中心とする遺跡であることが明らかとなっている。中でも、平安時代の製鉄遺構は、寄居町域の荒川沿いにある箱石遺跡や中山遺跡といった製鉄遺跡と共に注目されている。

そのため、深谷市教育委員会では、台耕地遺跡の周辺を重要な埋蔵文化財包蔵地であると位置付け、事前調査等を行なっている。

平成21年1月22日、台耕地遺跡地内の深谷市黒田字上南原764番1他37筆で、倉庫建設工事の実施が明らかとなった。市教育委員会は、施工主である永田不動産株式会社との協議を経て、平成21年7月15日～16日に当該地の確認調査を実施した。調査の結果、工事予定地内の一部から、縄文時代の竪穴建物跡と縄文土器、石器が検出された。この結果を踏まえ、発掘調査の実

施について、市教育委員会と永田不動産株式会社とで協議を行い、市教育委員会が主体となって発掘調査を実施することで合意した。

市教育委員会は直ちに、文化財保護法第99条の規定に基づき、埋蔵文化財発掘調査通知（平成21年7月30日付深教生発第407号）を提出し、準備に入った。なお、埼玉県教育委員会教育長から、平成21年8月1日付教生文第5-529号で指示通知を受けた。

2 発掘調査の経過

倉庫建設工事に伴う、台耕地遺跡第5次発掘調査の経過は、概ね以下の通りである。

9月3日（木）遺構確認。

9月7日（月）遺構確認、S J 1・2 調査。

9月8日（火）、9日（水）S J 1・2 調査、断面図作成。

9月10日（木）写真撮影、平面・断面図作成。

9月11日（金）、14日（月）S J 1床面精査、断面図作成、写真撮影、B区精査。

9月15日（火）S J 1埋甕炉調査、S J 2床面精査。

9月16日（水）写真撮影、断面図作成。

9月28日（月）S J 1埋甕炉調査、写真撮影、断面図作成、調査区清掃。

9月29日（火）空中撮影。空中測量。

調査面積は1040m²であり、縄文前期の竪穴建物跡2棟が確認された。地形は極めて起伏に富んでおり、出土遺構の数によらず、当時の景観を考える上で、重要な地点だったといえる。

今回の発掘調査を行なうにあたり、深いご理解とご協力をいただいた方々をはじめ、この文化遺産を記録保存し、後世に伝える作業のためにご協力いただいた全ての方々に敬意を表する。

Ⅱ 深谷市の地理的環境と周辺遺跡の様相

深谷市の地形を概観すると、東西に走るJ R高崎線付近を境として、南側に櫛挽台地が広がり、北側には妻沼低地が形成されている。櫛挽台地は、荒川によって作られた古い扇状地が浸食されてできた沖積台地で、寄居付近を頂部としている。妻沼低地は、利根川の自然堤防及び沖積低地であり、加須低地と並び利根川の中流低地の一つに数えられる。

櫛挽台地は、構造的には北西側の武蔵野面に比定される櫛挽面（櫛挽段丘）と、南東側の立川面に比定される寄居面（御棧威ヶ原段丘）とで段丘状に形成されている。櫛挽面は、ほぼJ R高崎線沿いの崖線で比高差5～10mをもって妻沼低地と接しているが、寄居面は高崎線より北へ1.5～1.8km程延びていて、比高差2～5mをもって妻沼低地と接している。扇頂部にあたる寄居付近の標高は100m程、接線付近での標高は、櫛挽面が40～50m、寄居面が32～36m、妻沼低地が30～31mである。櫛挽面は標高70m付近より発する上唐沢川、押切川、戸田川、唐沢川等が北流していて、櫛挽面北端部は南北に台地を開析する浅い谷が発達したものと考えられる。寄居面は、南では荒川に沿って発達しており、川に沿って段丘が数段みられる。台耕地遺跡は、この河岸段丘上に立地する。

深谷市内で確認されている旧石器時代の遺跡は多くはないが、荒川右岸の江南台地上には、細石刃や彫刻刀形石器が出土した白草遺跡がある。他に幡羅遺跡と花小路遺跡でナイフ形石器が1点ずつ出土している。

縄文時代草創期では、櫛挽台地先端部の東方城跡で尖頭器、下郷遺跡で有茎尖頭器が出土している。岡部地区では、石蒔A遺跡、北坂遺跡等多くの遺跡が存在する。荒川沿いでは、宮林遺跡、沢口遺跡で多縄文・爪形文土器を伴う住居跡や土坑が確認されている。

縄文時代早期では、四反歩南遺跡、百済木遺跡等、荒川右岸で遺跡が増加する。

縄文時代前期になると各地で遺跡は増加する。宮西遺跡、四十坂遺跡では関山式期、台耕地遺跡、上南原

遺跡からは諸磯式期の集落が確認されている。

縄文時代中期、特に後半になると、上野台周辺で多くの集落が確認されるようになる。これらの集落は、櫛挽面北部の小河川流域に分布している。台耕地遺跡や上南原遺跡でも、該期の集落が確認されている。

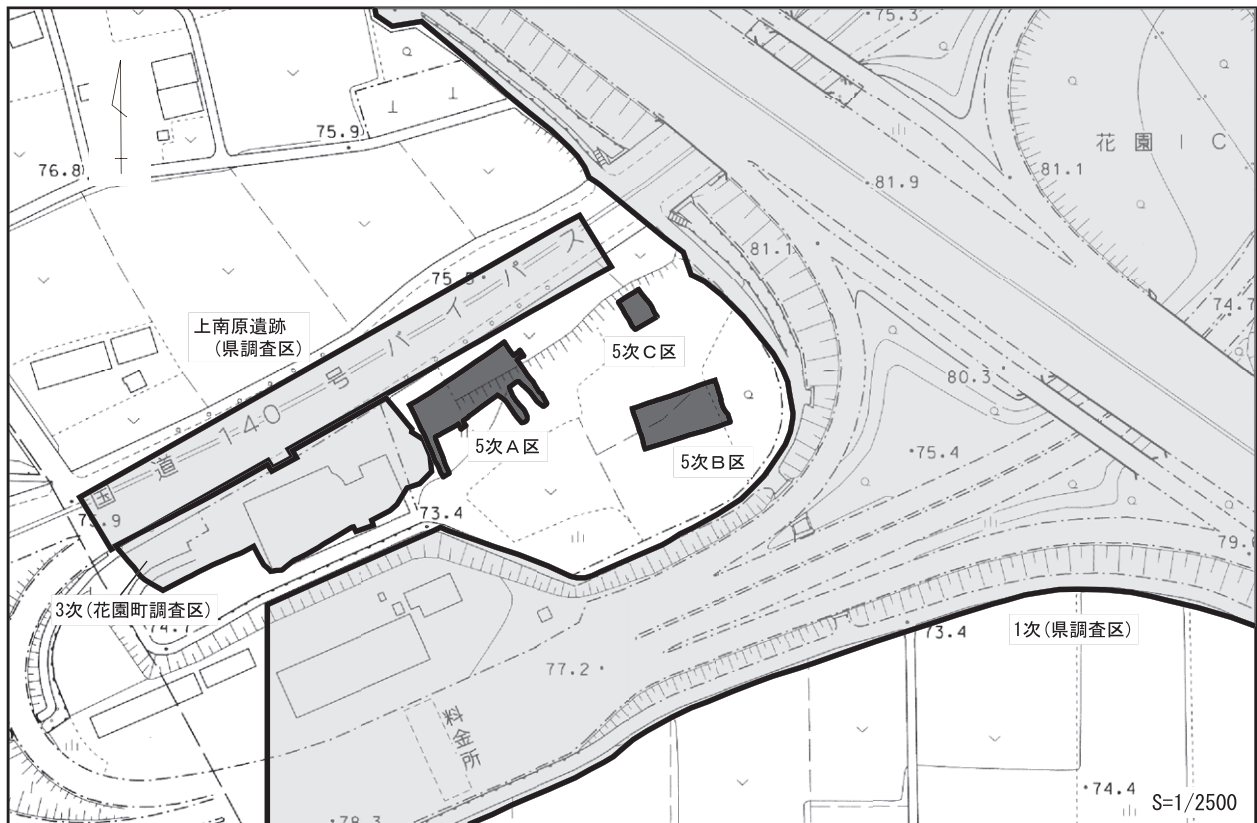
縄文時代後・晩期になると、縄文人の生活域の中心は櫛挽台地から妻沼低地へと移っていく。明戸東遺跡では後期初頭の住居跡、上敷免北遺跡では後期後葉の遺物包含層が検出されるなどしている。そして上敷免遺跡では、包含層から在地の後・晩期の資料に混じり、東海系条痕文土器が検出されたり、埼玉県では初の遠賀川系の壺が検出されるなど、他地域との交流を考えさせられる。また遺構が検出されなくても、妻沼低地にある遺跡を調査すると、ほとんどの場合に縄文後期の土器片が検出される状況である。荒川流域では、台耕地遺跡の西方約2kmにある橋屋遺跡が代表的である。

弥生時代に入ると、上敷免遺跡で中期の再埋葬と、若干時期が下る住居跡が同一の自然堤防上に確認され、弥生時代の集落のあり方を考える上で注目される。四十坂遺跡も該期の代表的な遺跡である。

古墳時代前・中期の集落跡は、下手計西浦遺跡や森下遺跡、皿沼西遺跡、石蒔B遺跡、六反田遺跡等で確認されている。前期では、台耕地遺跡や宮林遺跡の集落が大規模であると思われ、特に注目される。

古墳時代後期前半になると、妻沼低地で遺跡数は爆発的に増加し、妻沼低地の自然堤防上に大規模な集落が営まれる。この時期には小規模な円墳が数多く造られるようになり、幾つかの古墳群を形成する。中でも代表的なものに、櫛挽台地の先端部に形成される木の本古墳群や白山古墳群がある。下郷遺跡北部に分布する古墳群は、木の本古墳群の東端に位置する。大部分は20～30m規模の円墳で、台地の縁辺に沿って構築される。

7世紀頃には、それまでの大集落は縮小傾向になり、代わって宮ヶ谷戸遺跡や東川端遺跡、清水上遺跡等の、



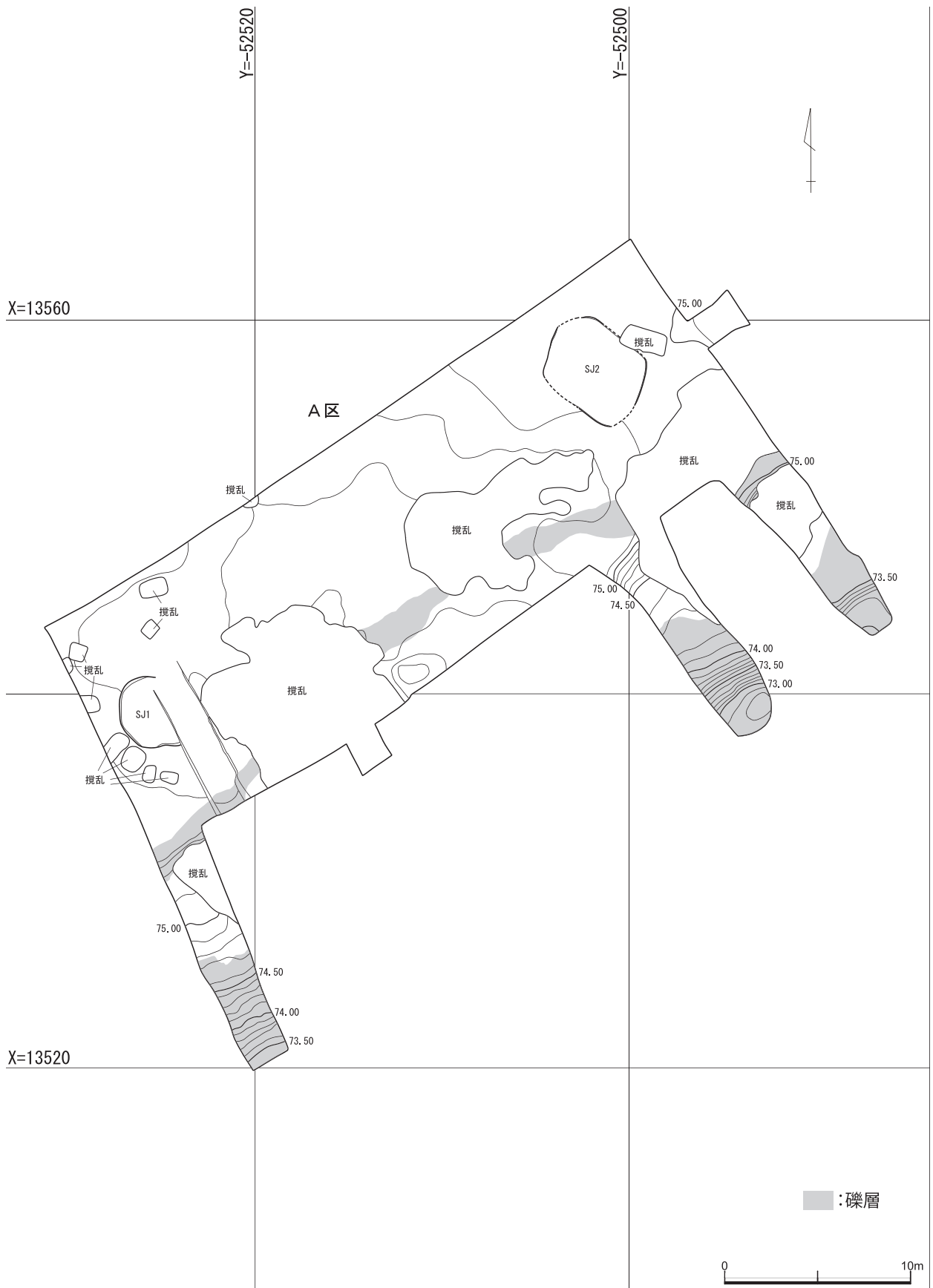
第2図 台耕地遺跡の位置と発掘調査区

幡羅郡家跡と推定される幡羅遺跡に比較的近い位置にある集落規模が拡大する傾向がみられる。律令期には、深谷市の東部は幡羅郡、西部は榛沢郡、南部は男衾郡に属すると考えられる。榛沢郡家跡は中宿遺跡で発見されている。また、幡羅郡家跡である東方の幡羅遺跡は、その範囲と内容を確認するための調査が継続中である。新屋敷東遺跡からは、正倉別院の可能性のある大型建物跡が確認されている。台耕地遺跡では、平安時代の集落と共に製鉄炉が多数確認されている。また、中宿遺跡、西浦遺跡、宮西遺跡、下手計西浦遺跡等でも平安時代の製鉄炉が確認されており、特筆される。

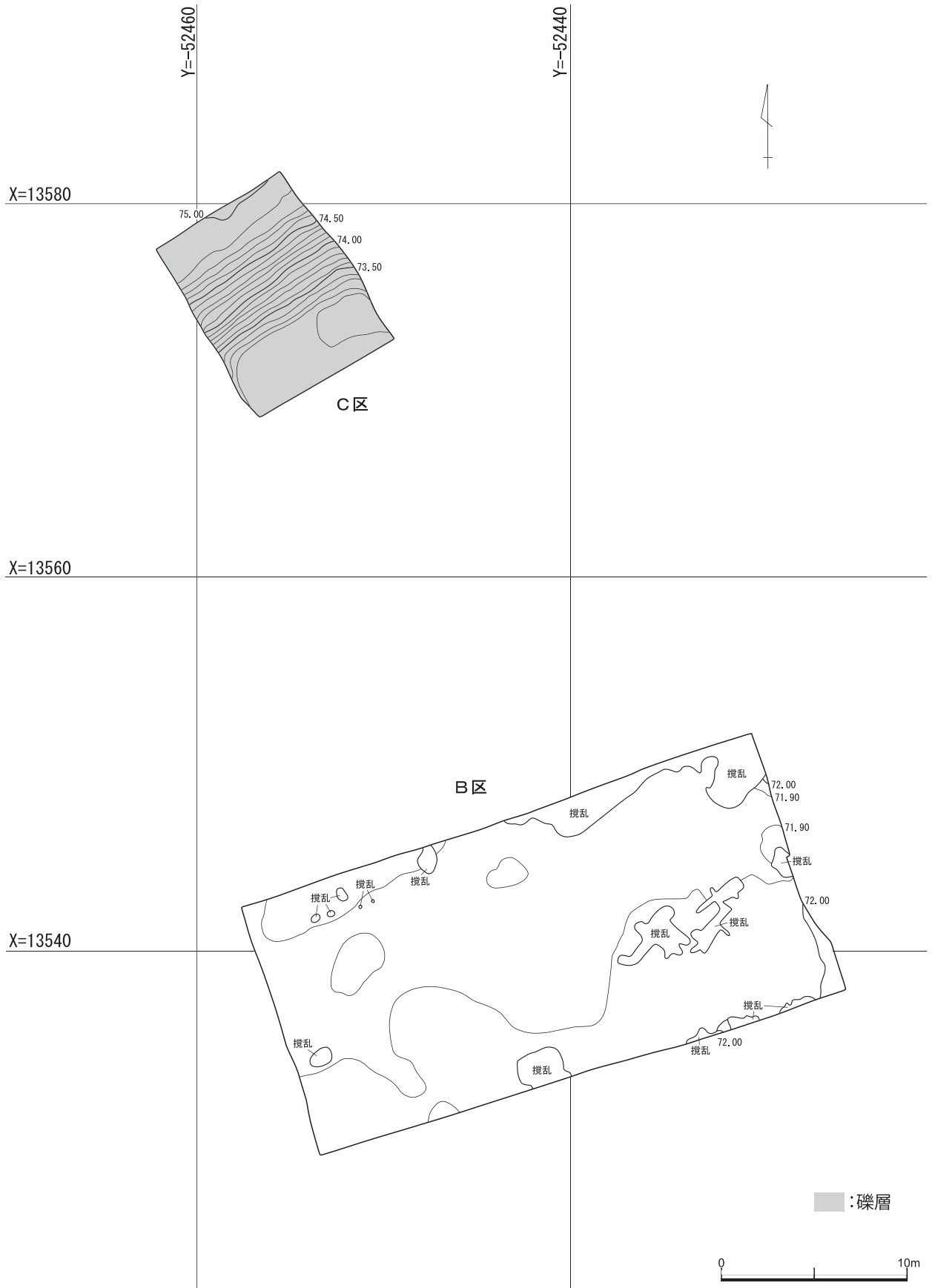
平安時代末期以降は、猪俣党武士団の居館が各地に出現する。代表的なのは岡部氏や人見氏で、岡部六弥太墓と人見氏館跡は、県指定史跡になっている。また、鎌倉街道上道の跡が、旧川本町域から旧花園町域に残る。そして室町時代以降は深谷上杉氏が活躍する。深谷上杉氏は、当初庁鼻和城に居を構えたと言われるが、

5代目房憲のときに、古河公方勢力との戦闘に備え、より堅固な深谷城に移ったとされる。深谷城跡の北東約1kmには、深谷上杉氏の宿老岡谷香丹が築いたと言われる皿沼城跡があり、北方の守りを堅固なものにしている。また、香丹が隠居後に移ったとされる曲田城跡が北西にある。下郷遺跡に程近い東方城跡は、深谷城から東に約3kmの台地の先端部に位置する。深谷城の周辺には家臣の館等が分布していたと思われ、南方約1.8kmには家臣の館である秋元氏館跡、南西約2.8kmには古河公方勢力を牽制し人見地域を防衛するために築かれたと考えられる館跡が検出された押切遺跡が存在する。また割山西遺跡では、伝承等が一切残っていないが、方形の区画溝が検出された。館跡と考えられる。

江戸時代になると、深谷城は程なく廃城となり、深谷の大部分は天領となる。また、岡部には岡部藩があり、陣屋が構えられた。



第3図 台耕地遺跡第5次調査区全体測量図(1)



第 4 図 台耕地遺跡第 5 次調査区全体測量図 (2)

Ⅲ 遺構と遺物

1 竪穴建物跡

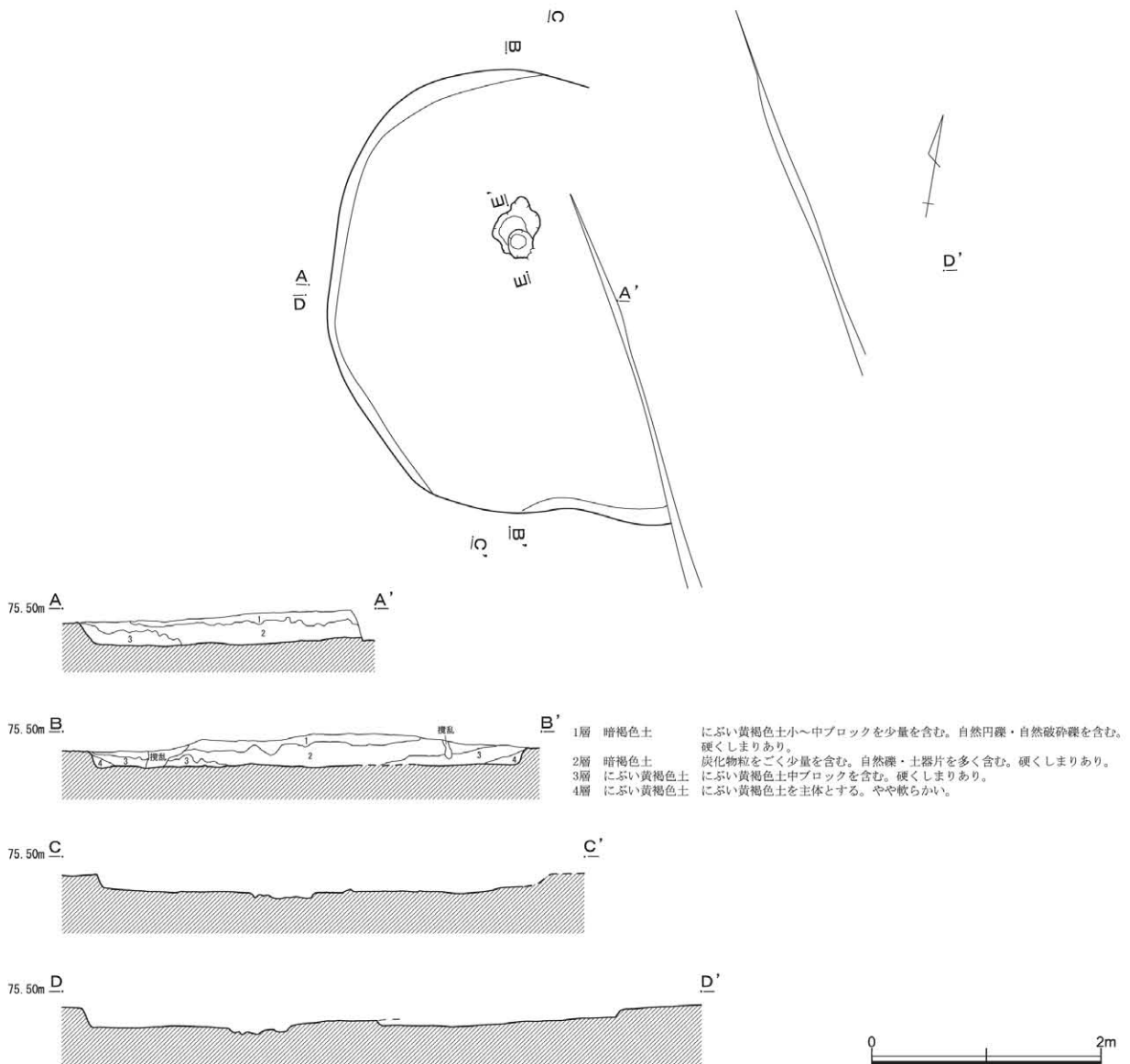
第1号竪穴建物跡（第5～13図、第2表）

A区西部に位置する。平面形態は不整円形を呈すると思われる。直径3.9m、確認面からの深さは20cmを測る。床面はほぼ平坦で、ピットは確認されなかった。

炉は埋甕炉であり、中央よりやや北寄りに位置する。掘方は、直径約20cm、床面からの深さ15cmの掘り込みと、その周りの直径35～50cm、床面からの深さ10cmの

不整形で浅い掘り込みから成る。一段深い部分に、炉体土器（第9図36と39）は埋設されている。覆土には焼土が認められないが、炭化物が含まれる。

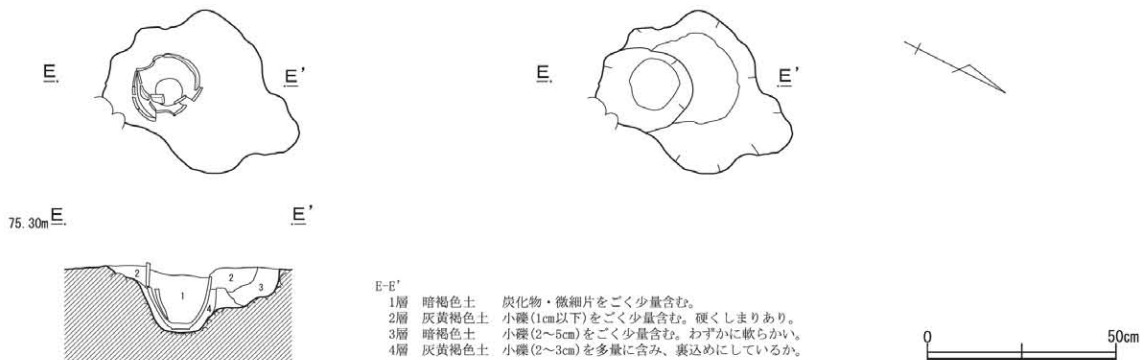
図示できた土器は、第8図1～第10図43である。諸磯a～b式にかけてのものが認められる。1～6・10・11は直線的に立ち上がる口縁部、7～9は強く湾曲する口縁部である。1～5は竹管状工具による結節沈線が施文される。1は木葉文内にRLの縄文が施される。2～5は口縁下に横位の結節沈線が引かれ、4はその



第5図 第1号竪穴建物跡



第6図 第1号竖穴建物跡遺物出土状況

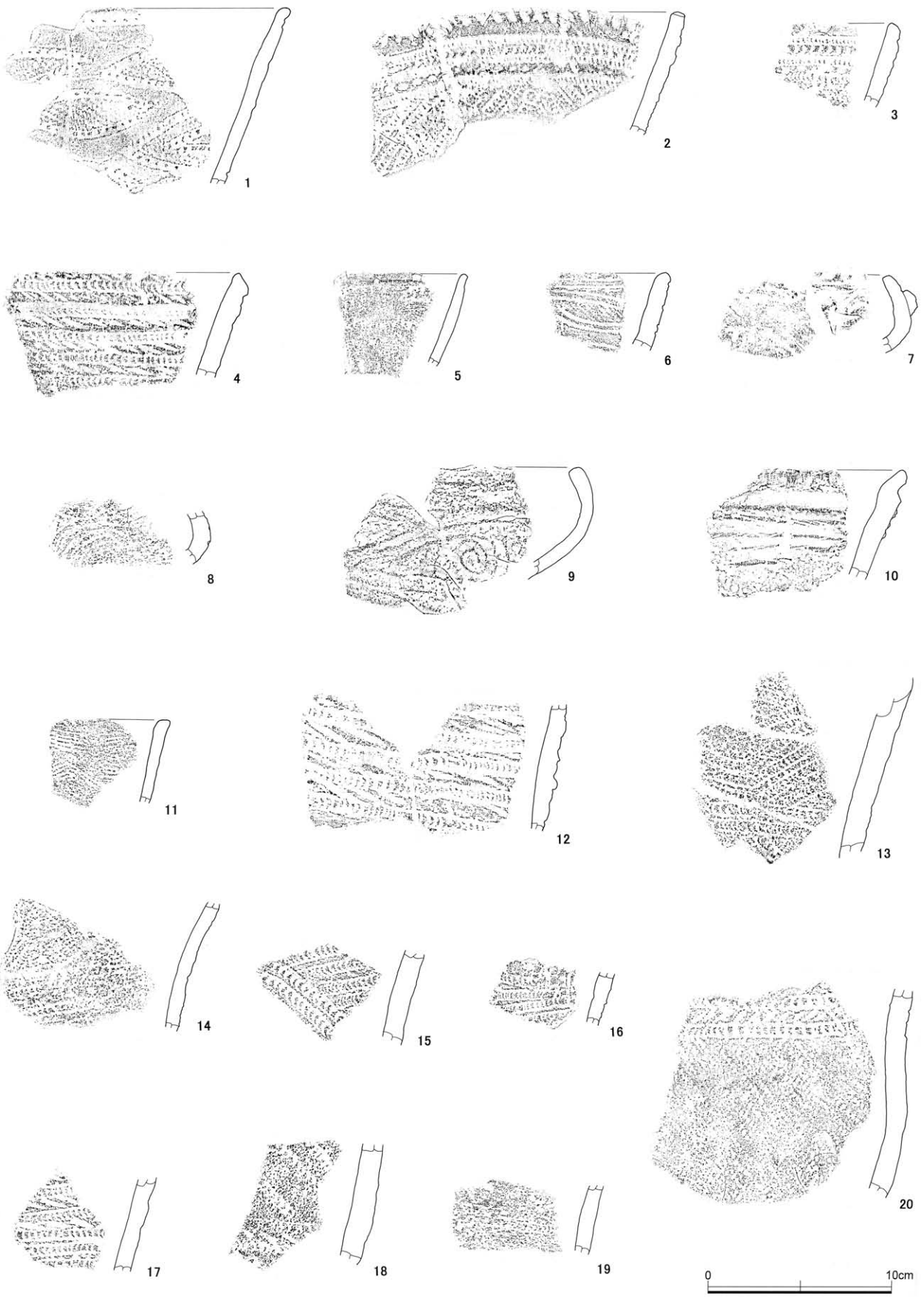


第7図 第1号竖穴建物跡埋甕炉

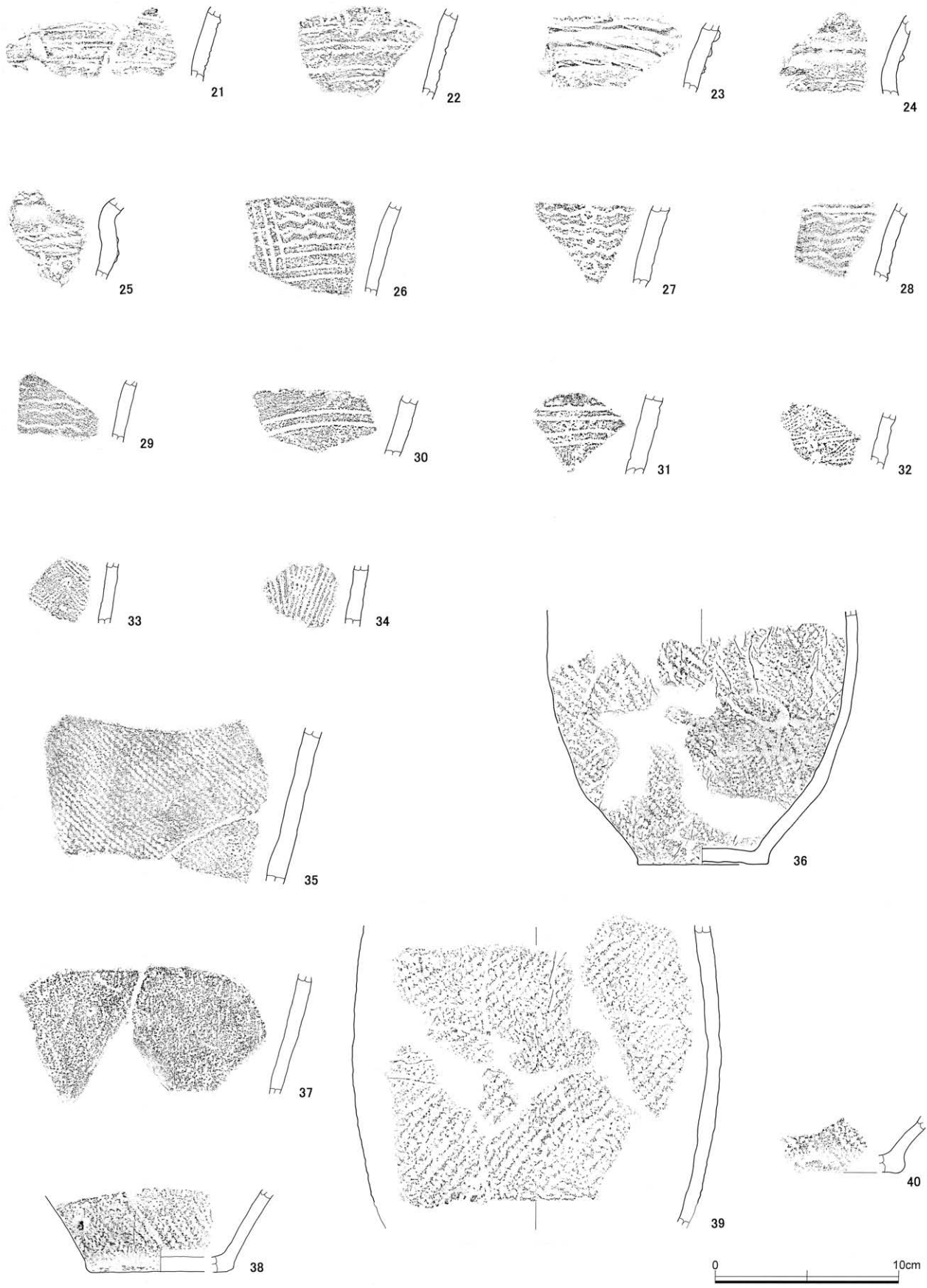
間に刻みが施される。2は口唇部が刻まれ、横位の文様下に三角形又は菱形の文様が描かれる。6は竹管状工具による平行沈線で木葉文が描かれ、文様内にはR Lの縄文が施される。7は瘤状の貼り付けがされ、沈線で渦巻文等が描かれる。8は竹管状工具による平行沈線で渦巻文、9は隆帯により渦巻文等が描かれる。10は口縁部がS字状に屈曲する。刻みのある隆帯が横位に施される。11は5本1組の平行沈線により、横位の波状文等が施される。

12~20は竹管状工具による結節平行沈線により、横位又は菱形の文様が描かれる。20は胴下半にR Lの縄

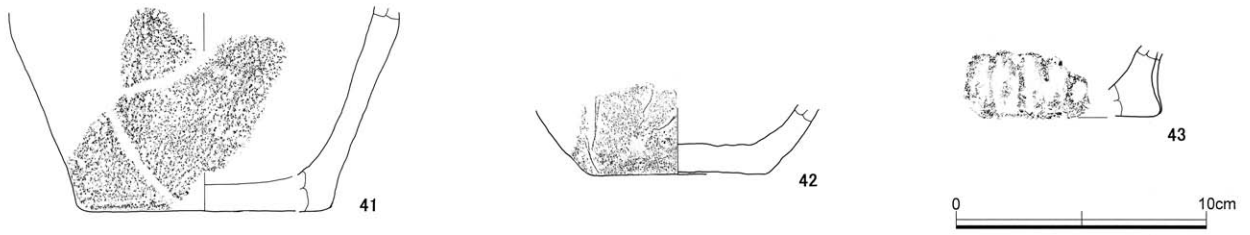
文が施される。21は竹管状工具による横位の平行沈線、22は沈線及び刻みが施される。23は刻みのある横位の隆帯が施され、地文にR Lの縄文が認められる。24・25は深く屈曲する器形で、24は隆帯、25は刻みのある隆帯が横位に施される。26~29は沈線による横位の波状文等が描かれる。27は円形の文様が縦に連続する。30・31は横位の沈線が施される。32は4本1組の平行沈線により、三角形又は菱形の文様が描かれ、円形の文様が縦に連続する。33は4本1組の平行沈線により、波状文等が描かれる。11と同一個体の可能性がある。34は縦位又は斜位の集合沈線が施される。諸磯c式で



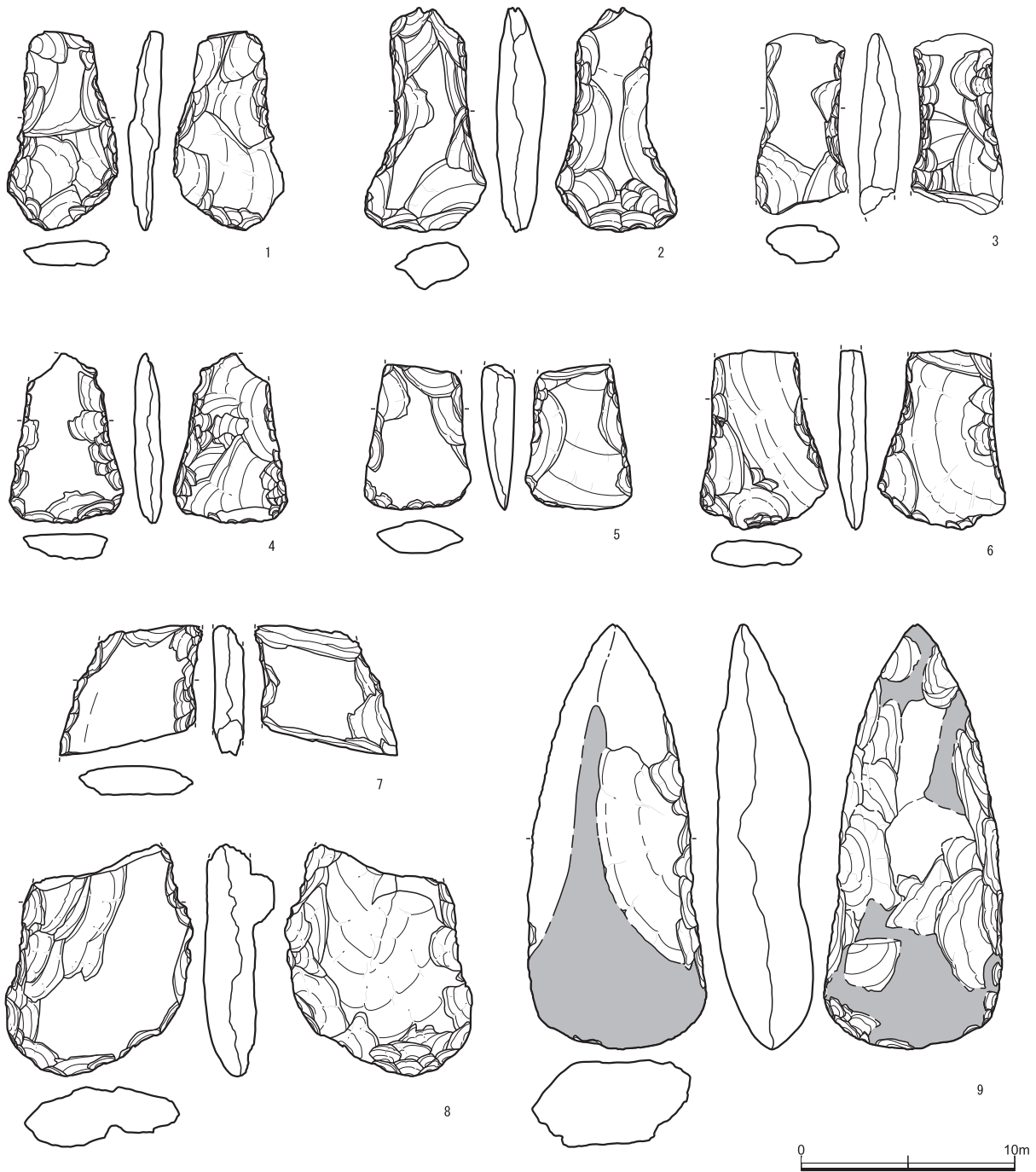
第8图 第1号竖穴建物跡出土土器(1)



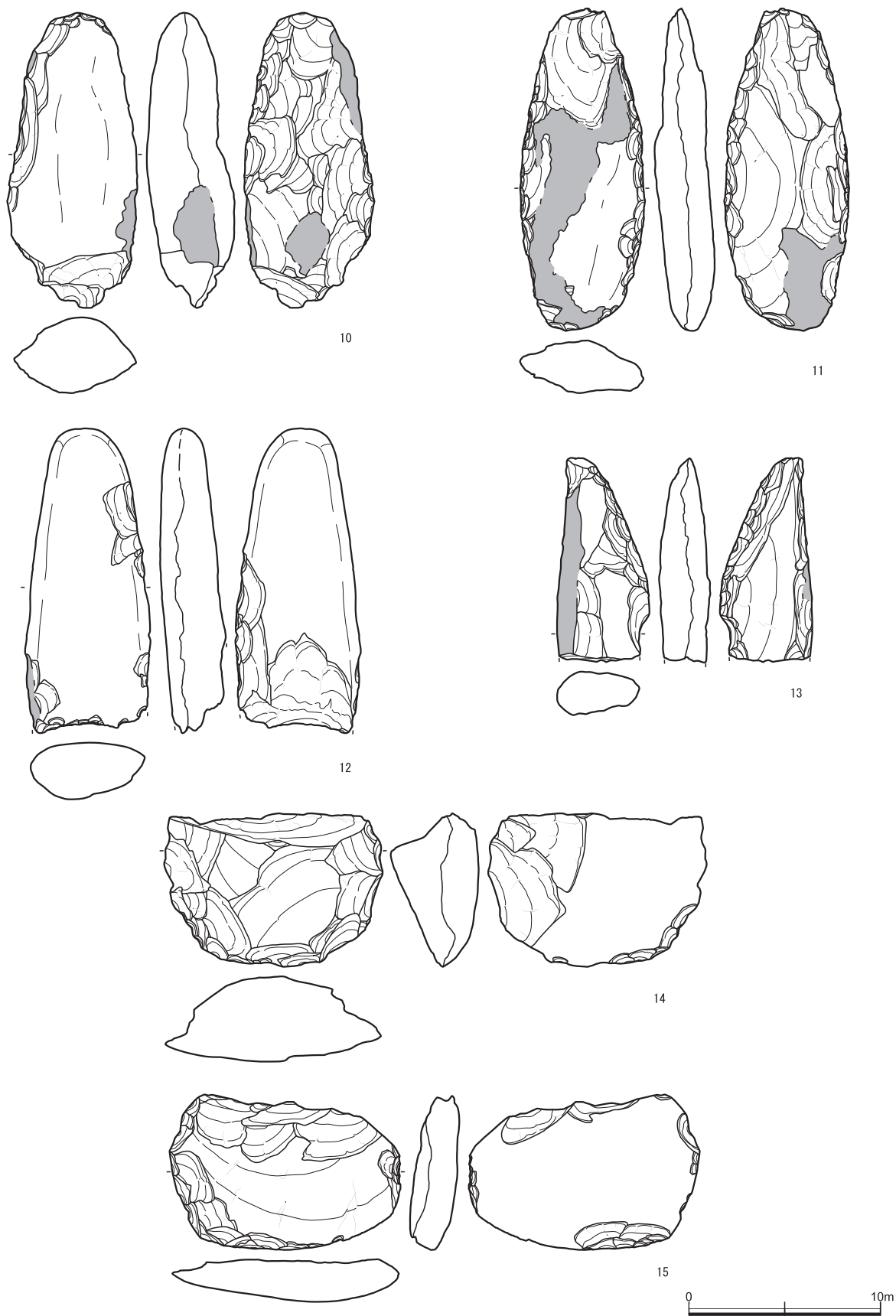
第9图 第1号竖穴建物跡出土土器(2)



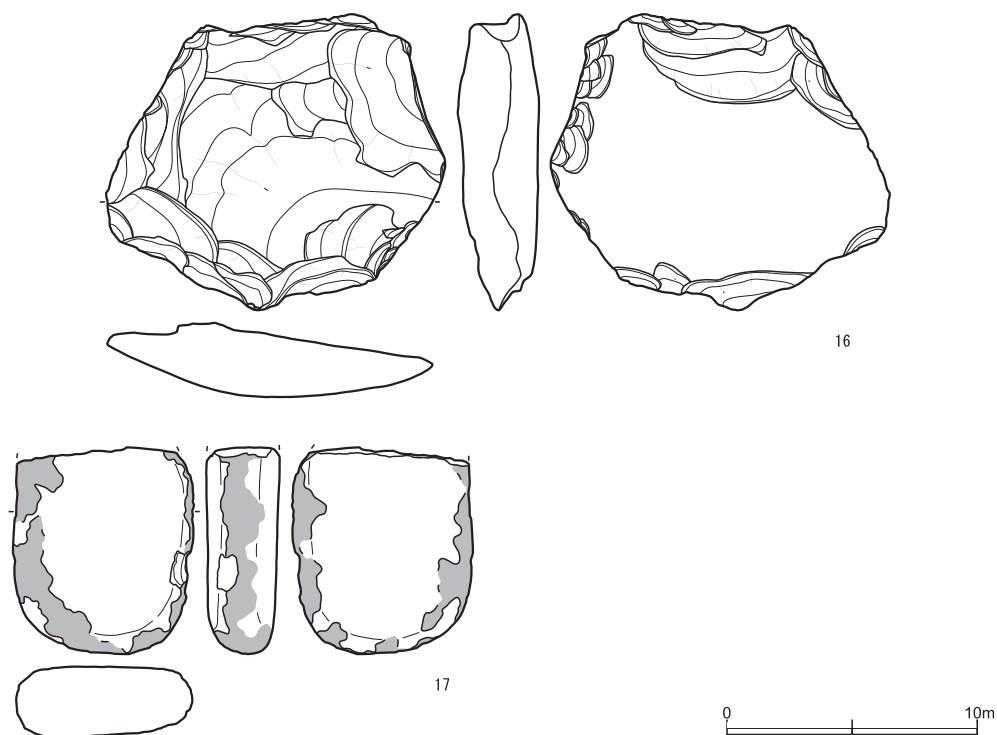
第10图 第1号竖穴建物跡出土土器（3）



第11图 第1号竖穴建物跡出土石器（1）



第12图 第1号竖穴建物跡出土石器(2)



第13図 第1号竪穴建物跡出土石器（3）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
1	打製石斧	9.2	5.1	1.2	61.8	砂岩	撥形。完形。
2	打製石斧	10.2	5.5	2.1	108.5	ホルンフェルス	撥形。完形。
3	打製石斧	8.2	4.2	1.8	71.2	ホルンフェルス	撥形。刃部欠損。
4	打製石斧	7.9	5.3	0.9	49.8	ホルンフェルス	撥形。基部欠損。
5	打製石斧	6.8	4.9	1.5	55.3	ホルンフェルス	撥形。基部欠損。
6	打製石斧	8.2	5.9	1.1	70.6	ホルンフェルス	撥形。基部欠損。
7	打製石斧	6.0	6.7	1.3	71.5	緑色岩	短冊形。着柄部破片。
8	打製石斧	11.3	8.2	2.2	263.6	結晶片岩	短冊形？。基部欠損。
9	打製石斧	19.8	8.5	4.4	1021.8	緑色岩	未成品
10	磨製石斧	15.3	6.4	4.2	549.5	緑色岩	未製品。刃部欠損。
11	磨製石斧	16.8	6.5	2.8	410.9	緑色岩	未製品。偏平礫素材。
12	磨製石斧	15.9	6.5	3.0	470.1	緑色岩	未製品。刃部欠損。
13	磨製石斧	10.5	4.6	2.4	172.1	緑色岩	未製品。刃部欠損。
14	礫器	8.1	11.2	4.5	391.9	ホルンフェルス	
15	礫器	7.8	11.9	2.2	267.9	ホルンフェルス	完形
16	礫器	12.0	13.2	3.1	518.9	ホルンフェルス	完形
17	敲石	8.0	7.0	2.8	287.0	閃緑岩	端部欠損

第2表 第1号竪穴建物跡出土石器観察表

あろうか。35はR Lの縄文が施されたもの、37は無文である。

36・39は埋設炉体土器で、36はR Lの縄文、39はL Rの縄文が施される。36は底径7.0cmを測る。38・40～43は底部資料である。38・40はR Lの縄文、43は縦位の隆帯が施される。38は推定底径8.0cm、41は推定底径10.0cm、42は推定底径7.0cmを測る。

次に、図示できた石器は、第11図1～第13図17である。1～8は打製石斧、9～13は磨製石斧、14～16は礫器、17は敲石である。詳細については、第2表に示した。

第2号竪穴建物跡（第14～19図、第3・4表）

A区東部に位置する。平面形態は隅丸長方形で、長軸5.5m、短軸4.4mを測る。床面はほぼ平坦で、確認面からの深さは20cmである。炉やピットは検出されなかった。倒木痕に切られている部分もあり、炉はそれに壊されている可能性がある。

図示できた土器は、第16図1～第17図36である。全て諸磯b式と思われる。1は縁孔土器である。強く湾曲する器形で、口縁部に巡る円形の孔の他に文様は認められない。推定口径33.0cmを測る。2は強く屈曲する口縁部で、推定口径31.0cmを測る。L Rの縄文と横位の平行沈線が施される。3～12は口縁部資料である。3は強く屈曲する口縁部で、平行沈線が横位に施される。4・5は同一個体の可能性がある。波状口縁を呈し、隆帯で文様が描かれる。口唇部には幅広の刻みが施される。地文にL Rの縄文が認められる。6～8・11は湾曲する口縁部である。6は突起を持ち、隆帯で文様が描かれる。7は緩波状口縁で、平行沈線、結節沈線、刻みにより文様が描かれる。8は矢羽状の刻みが施される。9・10・12は直線的に立ち上がる口縁部である。9は口縁部及び口縁下に刻みが入る。10は横位の沈線が施される。11は磨耗が激しく、横位の沈線のみ確認できる。12は無文である。

13～19・21は刻みのある隆帯で文様が描かれたものである。13・18はL R、14・16・17・19・21はR Lの

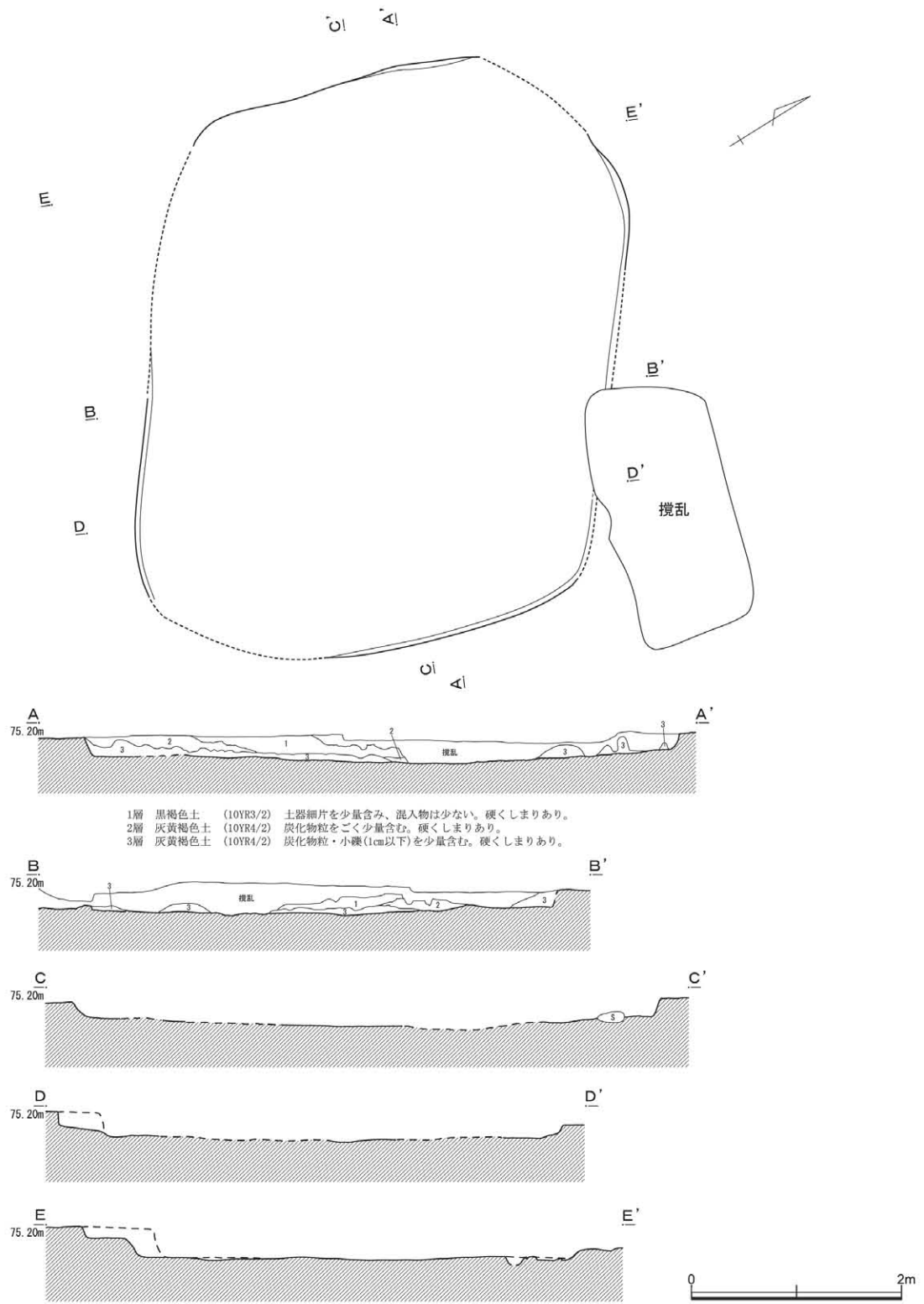
縄文を地文に持つ。20・22～24・26は平行沈線、25は集合沈線により文様が描かれる。27は押圧文、28は刻みが横位に連続する。29は浅鉢である。胴上部に段を有す。30はL Rの縄文が施される。31は強いナデ整形痕が横位に巡る。32は胴下半で強く屈曲する。刻みのある隆帯が横位に巡り、R Lの縄文が施される。33～36は底部資料である。33はR Lの縄文が施される。33は底径10.8cm、34は推定底径9.2cm、35は底径8.0cm、36は推定底径13.0cmを測る。

次に、図示できた石器は、第18図1～第19図13である。1は石鏃、2～10は打製石斧、11は刃部磨製石斧、12は磨製石斧、13は礫器である。詳細については、第3・4表に示した。

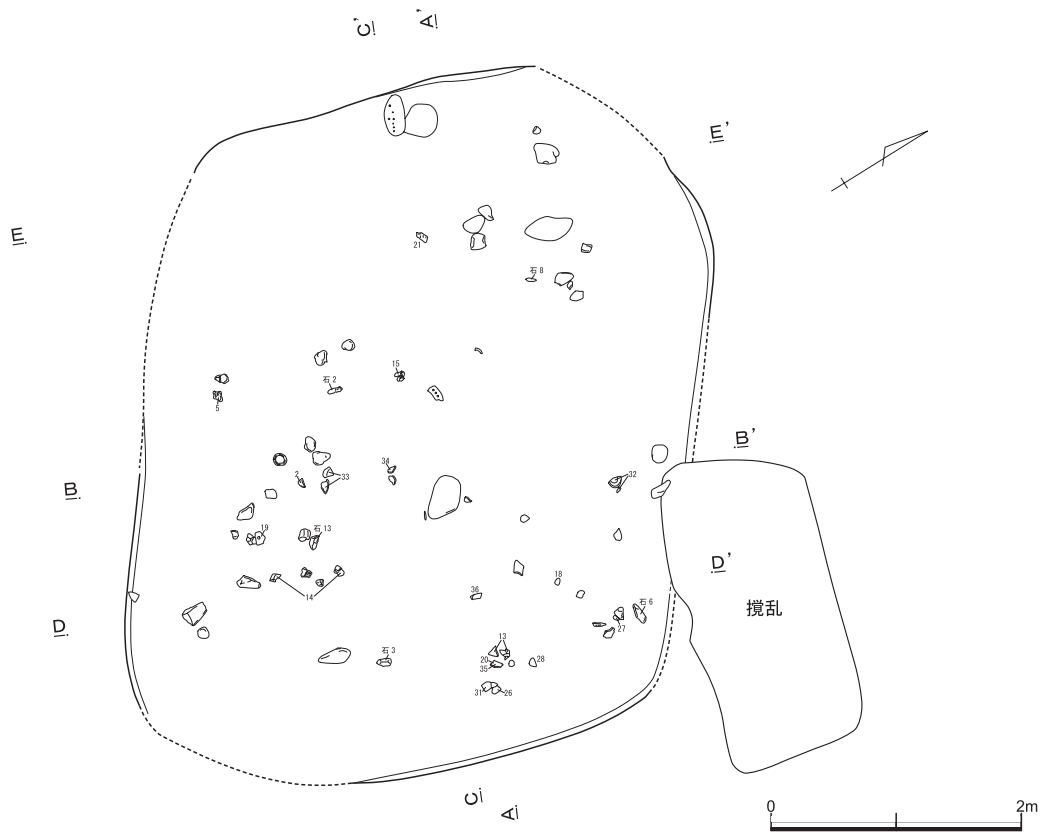
2 調査区出土遺物

図示できた土器は第20図1～3である。全てB区から出土した。1は鋸歯状の集合沈線と、円形及び楕円形の貼付文が施される。2は底部資料である。縦位の集合沈線と、楕円形の貼付文が施される。推定底径9.4cmを測る。1・2は諸磯c式と思われる。3はやや屈曲する器形である。横位の沈線と弧状の文様が描かれる。後期前半頃の所産であろうか。

次に、図示できた石器は、第21図1～6である。全てA区から出土した。1は石匙、2～5は打製石斧、6は磨製石斧である。詳細については、第5表に示した。



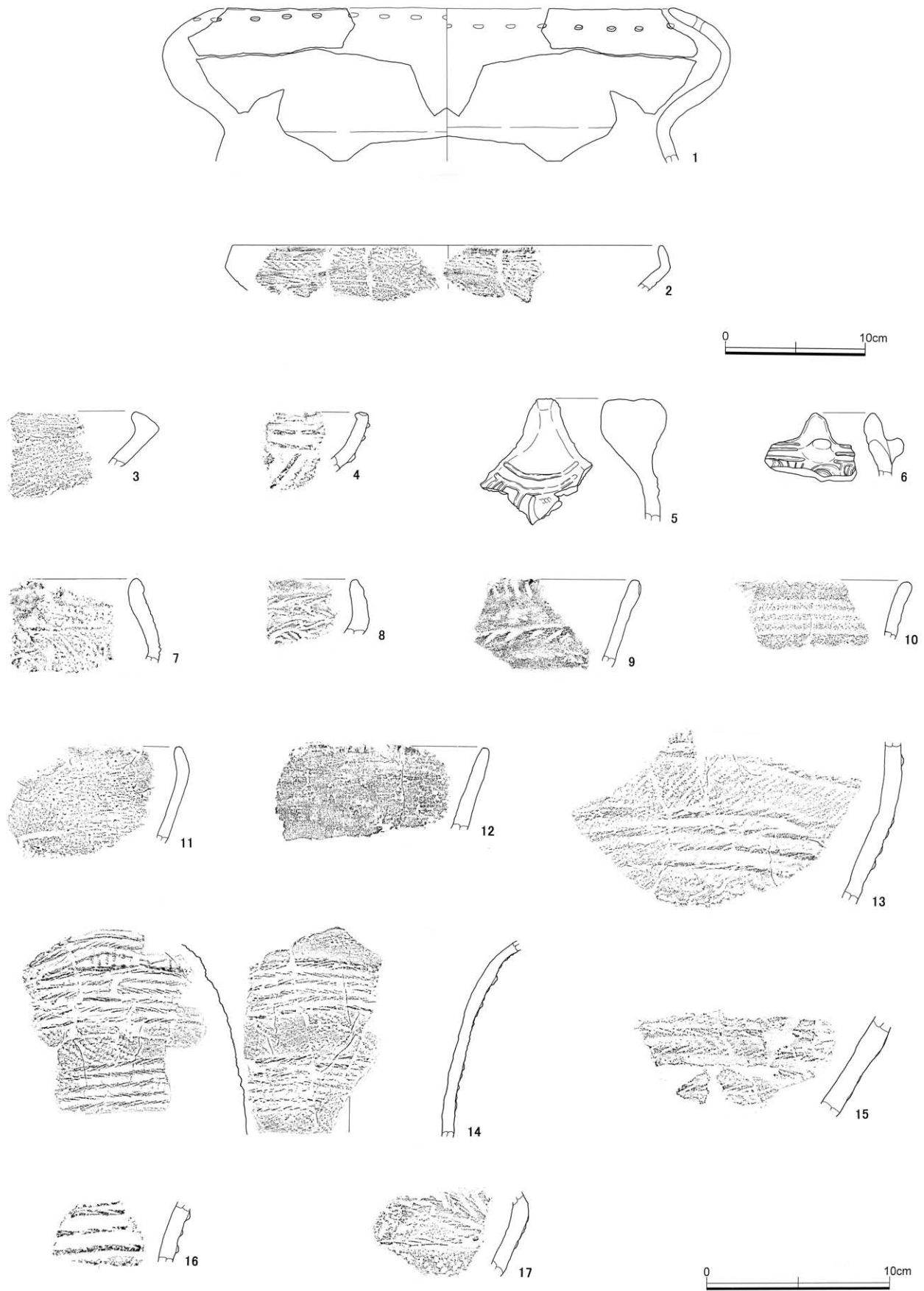
第14図 第2号竖穴建物跡



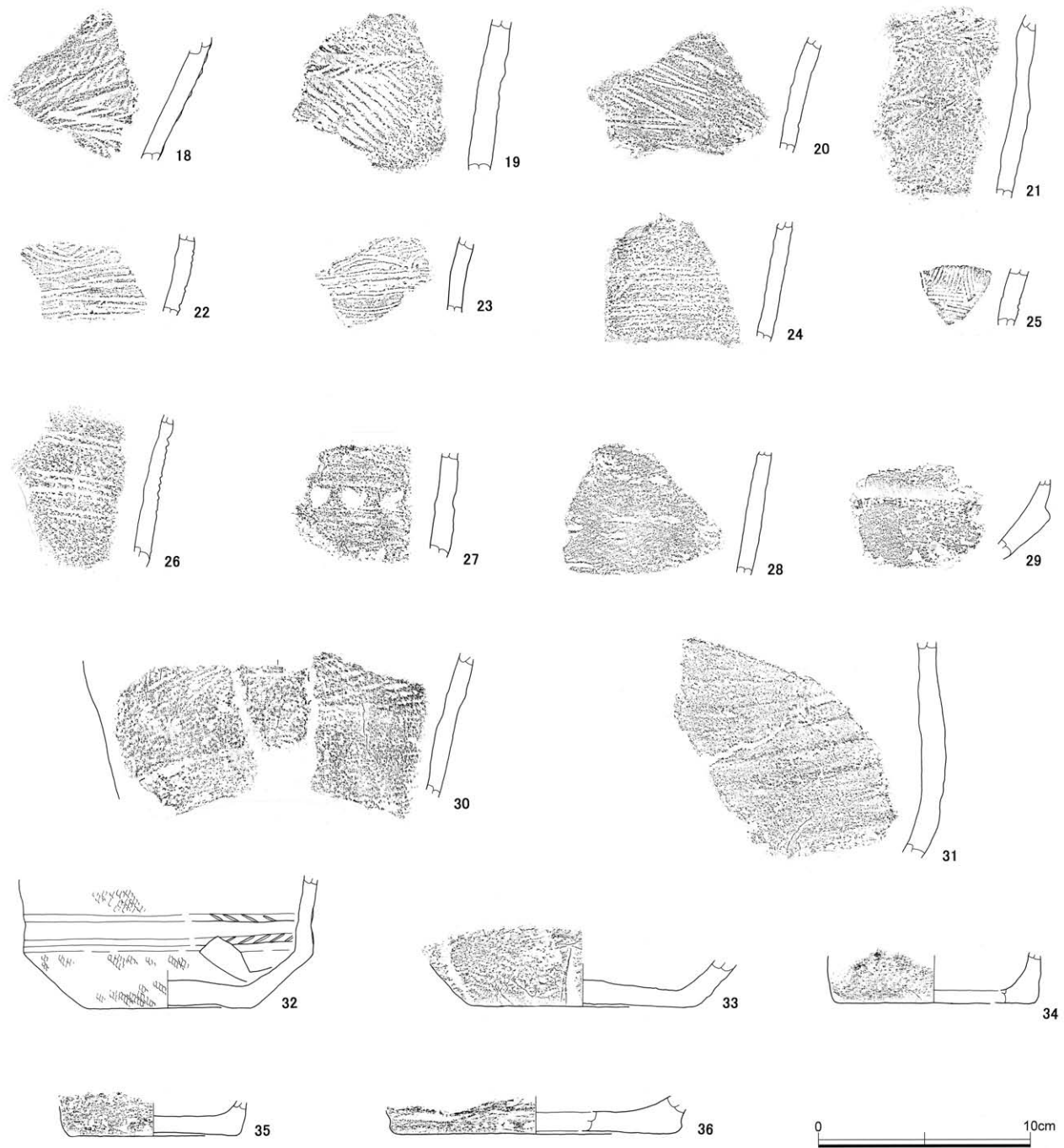
第15図 第2号竖穴建物跡遺物出土状況



第2号竖穴建物跡調査風景



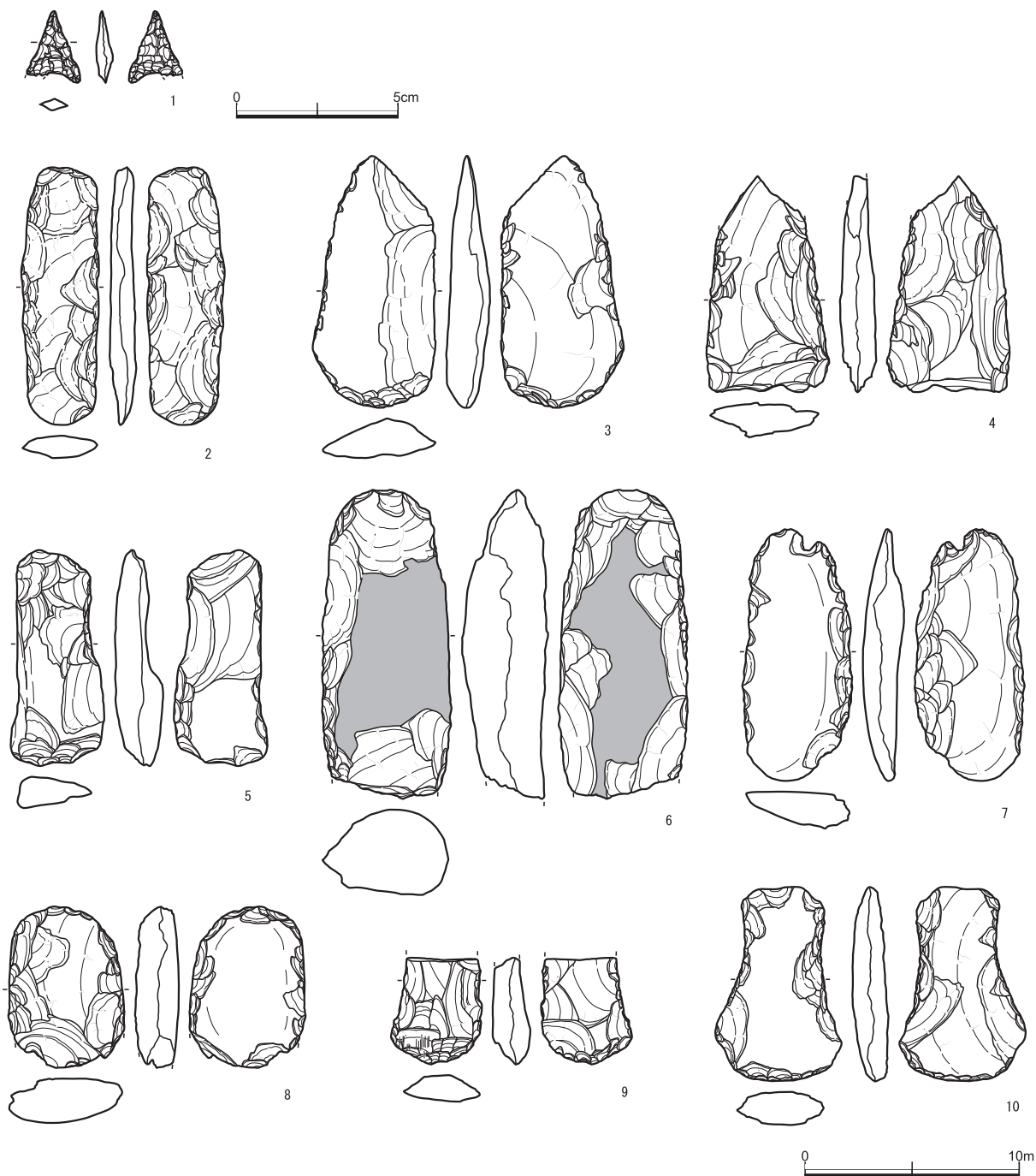
第16图 第2号竖穴建物迹出土土器(1)



第17図 第2号竪穴建物跡出土土器（2）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
1	石鏃	2.2	1.7	0.5	1.1	チャート	凹基無茎。片方脚部欠損。
2	打製石斧	11.9	3.6	1.2	72.5	ホルンフェルス	短冊形。完形。
3	打製石斧	11.6	5.6	1.7	115.2	砂岩	短冊形。完形。
4	打製石斧	9.9	5.8	1.5	92.4	ホルンフェルス	撥形。基部欠損。
5	打製石斧	9.9	4.3	2.0	96.0	ホルンフェルス	短冊形。完形。
6	打製石斧	14.2	5.8	3.8	449.0	ホルンフェルス	短冊形。完形。
7	打製石斧	11.5	5.0	1.6	106.7	ホルンフェルス	短冊形。完形。

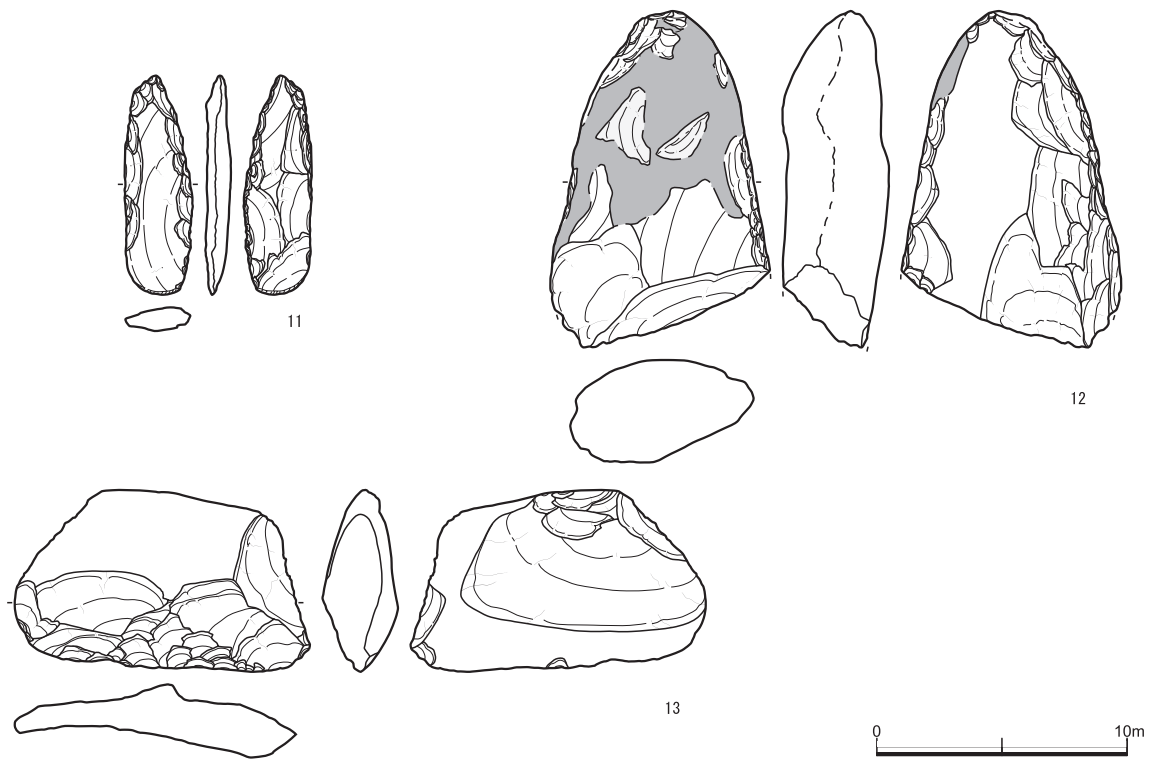
第3表 第2号竪穴建物跡出土石器観察表（1）



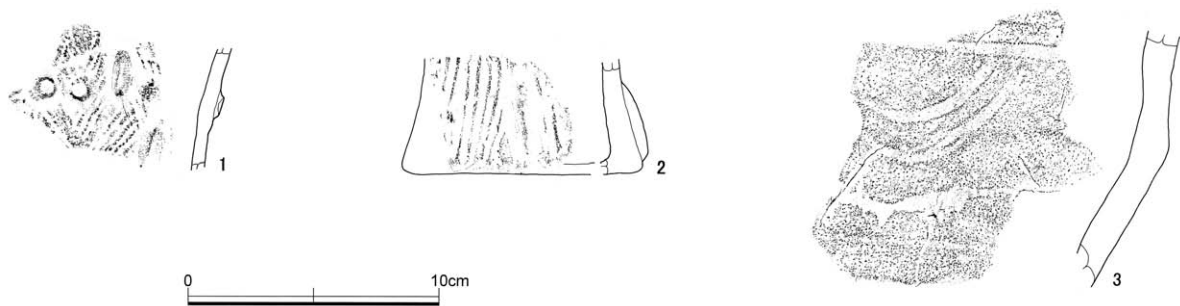
第18図 第2号竖穴建物跡出土石器（1）

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
8	打製石斧	7.4	5.5	1.9	105.2	ホルンフェルス	短冊形。刃部欠損。
9	打製石斧	5.0	4.1	1.5	39.3	頁岩	短冊形。基部欠損。刃部に使用痕あり。
10	打製石斧	9.0	5.8	1.6	102.7	ホルンフェルス	撥形。完形。
11	刃部磨製石斧	8.7	2.7	0.9	27.3	緑色岩	短冊形。完形。
12	磨製石斧	13.4	8.4	3.9	519.4	緑色岩	未製品。刃部欠損。
13	礫器	6.8	11.4	2.2	167.6	砂岩	打製石斧未成品の可能性あり。

第4表 第2号竖穴建物跡出土石器観察表（2）



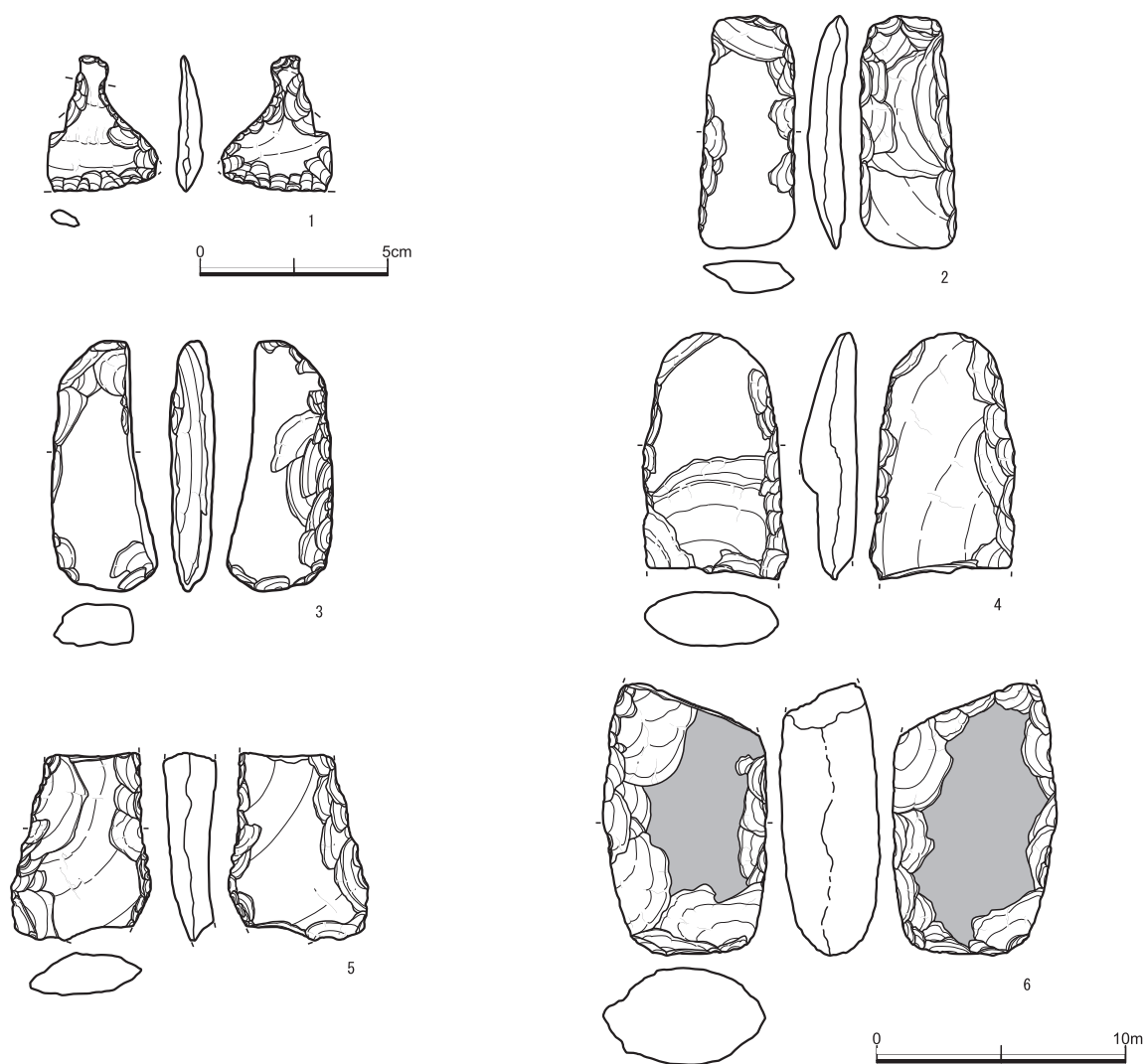
第19図 第2号竪穴建物跡出土石器(2)



第20図 調査区出土土器

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
1	石匙	3.1	3.0	0.5	5.4	チャート	横型。刃部先端欠損。
2	打製石斧	9.4	3.9	1.3	66.7	ホルンフェルス	短冊形。完形。
3	打製石斧	9.9	4.0	1.5	82.7	ホルンフェルス	短冊形。完形。
4	打製石斧	9.8	5.6	2.2	142.0	ホルンフェルス	短冊形。刃部欠損。
5	打製石斧	7.4	5.6	2.0	103.3	緑色岩	撥形。基部欠損。
6	磨製石斧	10.9	6.4	3.5	375.8	緑色岩	未製品。基部欠損。

第5表 調査区出土石器観察表



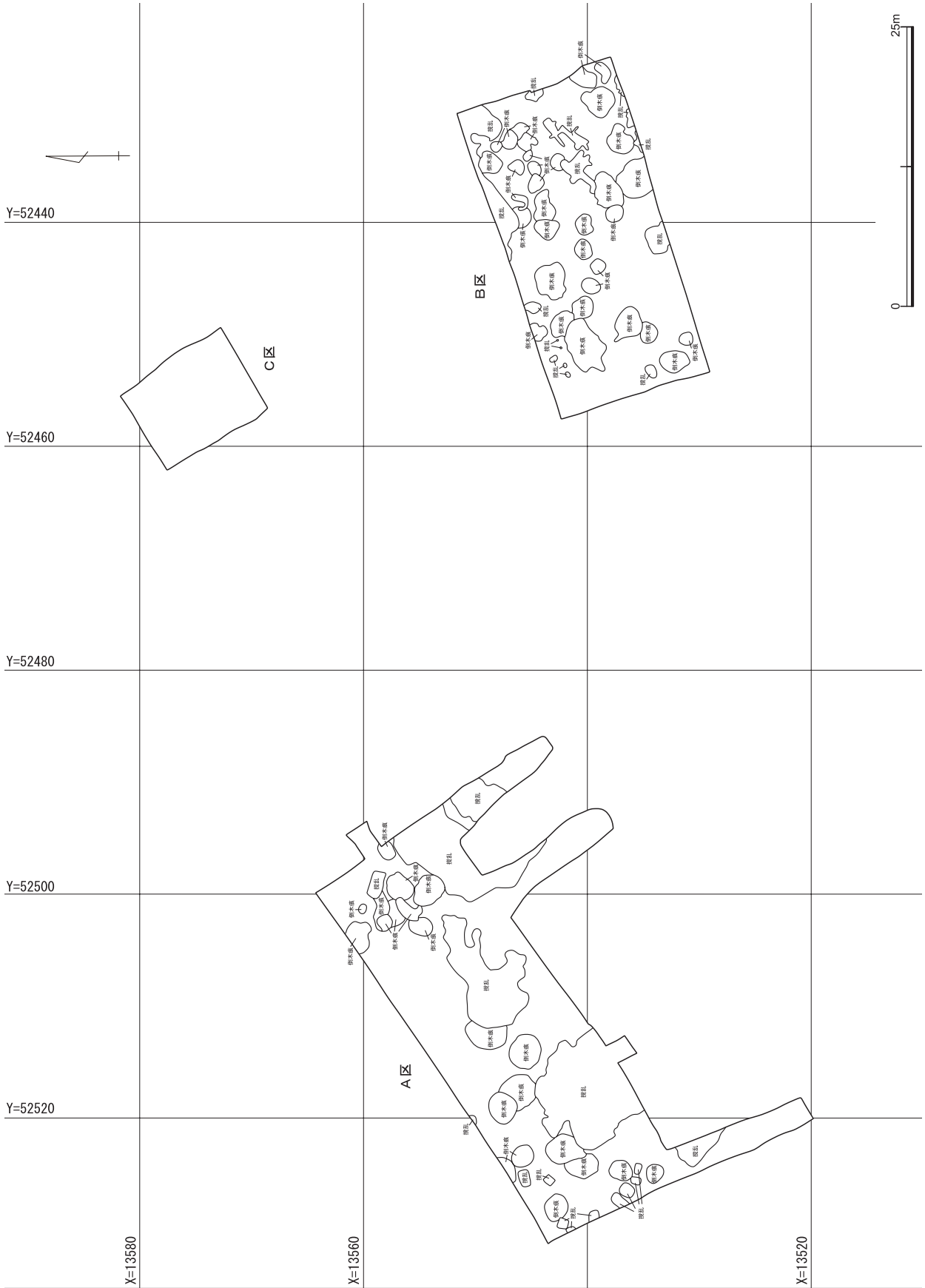
第21図 調査区出土石器

3 地形と倒木痕

調査区周辺の地形は、A区周辺が最も高く、遺構確認面の標高が約75mである(第3・4図)。A区南部トレンチ部分やC区は斜面となり、南東に向かって急激に低くなる。斜面部の表土直下は、礫層であった。B区の確認面は標高約72mであり、斜面部と3m程度の比高差がある。低地部分には、A区南トレンチより若干南で湧水があった他、現地表面から判別できる流路跡とみられる痕跡が数条確認できた。

また、倒木痕が多数確認された(第22図)。表土直下に礫層がある斜面部等には無く、A区北半及びB区に

集中している。竪穴建物跡との切り合いでは、それより古いものが大多数を占めていると思われる。



第22图 倒木痕分布图

Ⅳ 調査のまとめ

前章まで述べてきた通り、今回の調査では、諸磯 a～b 式期の竪穴建物跡 2 棟と、多くの土器、石器が出土した。竪穴建物跡は河岸段丘上に立地し、地形は南へ向かって急激に下がる。なお低い地点には、現地表面から判別できる流路跡とみられる痕跡が数条あり、遺構は確認されなかった。

今回の調査区周辺の状況は第23図に示した。北に隣接する上南原遺跡調査区からは、諸磯 a～b 式期の竪穴建物跡11棟が確認されている他、西に隣接する台耕地遺跡第3次調査区からも同時期の竪穴建物跡が確認されている。段丘上の平坦部に、諸磯 a～b 式期の集落が広がり、本調査区の A 区北部はその南東端と考えられる。一方、第1次調査区内には、中期中葉から後半にかけての集落が広がる。

第3次調査区南部の斜面部からは、平安時代の製鉄炉が4基確認されている。そのため、今回の調査区にも同様の遺構が存在することが想定されたため、試掘時には特に多くのトレンチを入れたが、遺構、遺物共に確認されなかった。製鉄炉は、それより約

200m北東の第1次調査区内からも3基まとまって出土している。幾つかのまとまりが、分散している状況である。平安時代の集落は、その周囲、特に第1次調査区内に多く分布している。

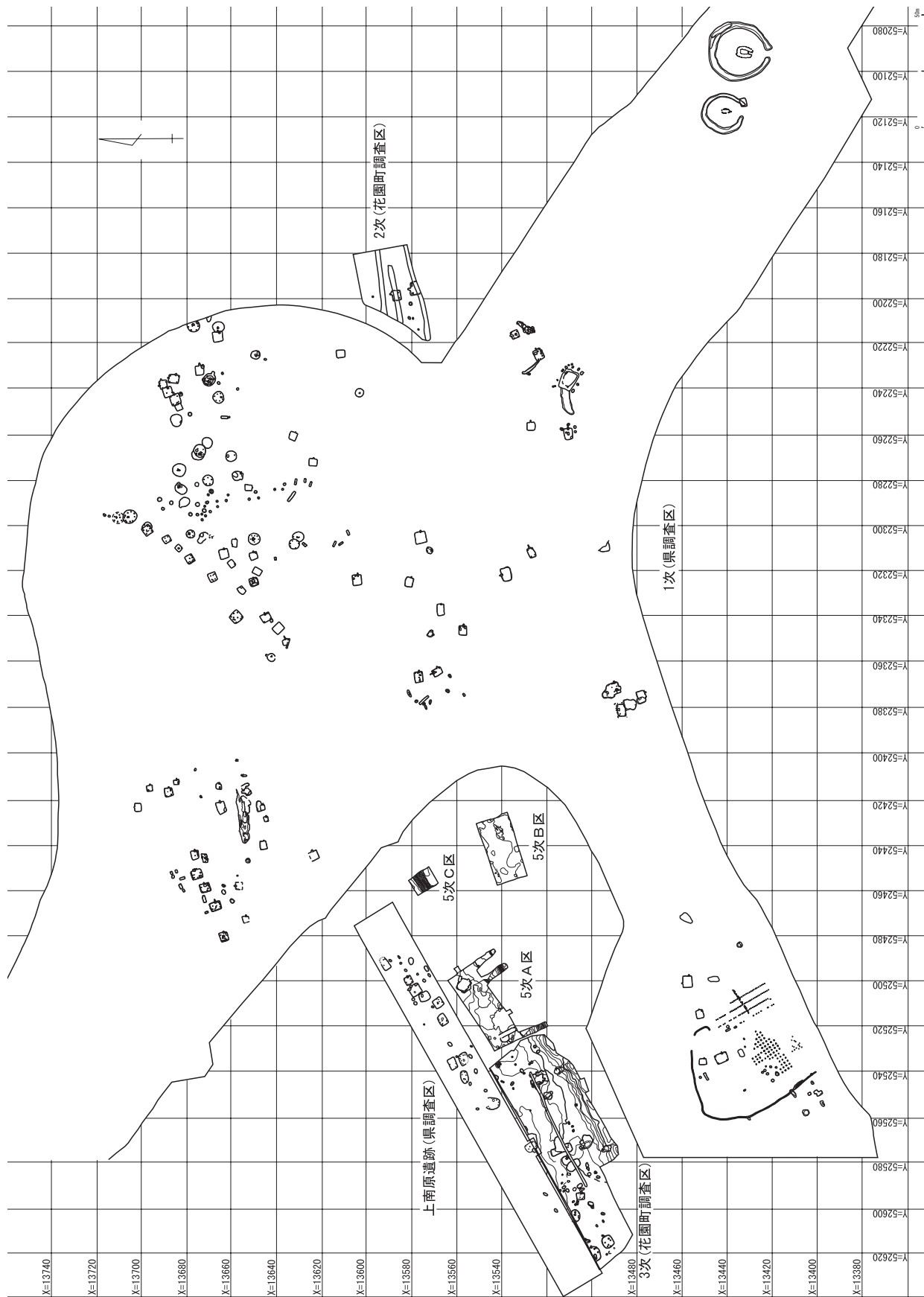
また古墳時代では、第1次調査区から前期の竪穴建物跡が12棟確認されており、注目される。第1次調査区の南東端には、古墳時代後期の円墳2基がある。共に横穴式石室が確認された。それより南には、黒田古墳群があり、その分布域の北端に当たるものである。

台耕地遺跡及びその周辺の地形は複雑であり、遺構の分布はそれによって説明できる部分が多い。そのため、今後、地形の詳細な検討と遺構分布の分析を併せて行なうことが重要と考えられる。

最後に改めて、この発掘調査に深いご理解とご協力を頂いた方々を始め、台耕地遺跡の発掘作業、整理作業に携わり、文化財を記録保存して後世に残すことにご尽力いただいた皆様に敬意を表したい。

〈参考文献〉

- 市川修他 1982 『上南原』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第10集
酒井清治 1984 『台耕地（Ⅱ）』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第33集
鈴木敏昭他 1983 『台耕地（Ⅰ）』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第27集
森下昌市郎 1998 『台耕地遺跡－第2次調査－』 花園町遺跡調査会発掘調査報告書第3集



第23図 台耕地遺跡全体測量図